

僕と東京

山之口 獯 (大正11年 34期)

僕と東京とでもいうと、何かとくに目立つ関係があるのかと、思われますけれども、そういうことは、まあ別にしまして、東京というこの都会は、ともかく知らない人がずいぶん集っている。前も後も、ともかく、いわば縁もゆかりもないという環境である。こういう環境、人が大勢いますけれども、何か大勢というのをつきつめれば、つきつめるほど、そのまん中に、ぽつんと自分だけがいるような感じ。それにひじょうに賑やかであるけども、一種の孤独感というものが、実感としてもっているような気がします。

けれども、見知らぬ人がたくさん集まっているということは、けっきょくこの都会というものが、それだけにまた、抱擁力があるということによるんじゃないか、と思うんです。

僕は、自分の生活の事情でいろんな仕事を東京でやってきました。東京生活四十年の間に、前半の十何年の時は、まあ言葉はあんまりよくないと思うんですけれども、いわゆるルンペン生活、といったふうな生活だった。そのあいまには、本屋さんの荷造り人をしたり、あるいは暖房工事の仕事をしたり、あるいはまた、おわい屋ににたような浄化槽の掃除とか、そういうことをやったりしていました。

つまり、一般の人の眼から見れば、まあそういうことまでして、生きるくらいなら、死んだ方がましではないか、と、まあ冗談半分ではあるけれども、言った人がありましたけれども、そういうことをさせることができたということも、これはやはり、東京の抱擁力には、抱かれたといっても、いいんではないかと思うんです。

田舎ですと、町を歩いていても、もうあれは山口の三男坊だ、見ただけでそういうふうな、戸籍までも、ちゃんと知っているような状態ですから、そういう知っている人の中で親兄弟がはずかしがるような仕事なら、そういうことは、とうてい田舎ではできない。

だけれども、東京は見知らぬ人、誰もみな知らない人ではないか、という気持ちがあるだけに、なんでも、そのやってやるんだ、というふうな気持ちをもつことができた。そういう点で、まあ東京というところは有難い、土地です。

それから、これはどういう理由だかは、自分でもはっきりしませんけれども、どうもとかいというものをなかなか離れることができない。というのは人間のいない、といえますか、人間のいないところでは落ち着かない。どこか景色のいいところへ行っても、東京を離れて、すぐぼくは東京へ舞い戻りたくなる。

仕事なんかでも、当時ぼくは住所不定で、ともかく寝る場所も何にもなかった時代ですけれども、芝のある珈琲屋に、朝から晩までねばっていて、当時のコーヒー代十銭だけあれば、もう朝から晩まで、ぼくはその珈琲屋にいられたわけです。

その珈琲屋の入口の、右側の、一角のボックス、ここは僕の書齋みたいになっていて、僕はその一杯もらったコーヒーを、もうすっかり飲んでしまった、空っぽの茶碗をいつま

でも前にして、そこに原稿用紙を全部整理し、またいくつかの詩をそこで書いていたのであります。

そんなふうな訳ですから、静かなところでの仕事、静かなところだと仕事ができそうだけれども、田舎に引っ込んでいると、かえって仕事ができない。あまりに自分自身だけのはっきりし過ぎて、自分自身が邪魔になるような感じで、まあ何ととっても、その、それほど東京というところは広くて、四十年近くいながら、全然知らないところが、あるのであります。一面また、借金をしたりなんかするにも、田舎よりも、ひじょうに都合がいいんじゃないか、と思うのであります。

これはまあ、一つの、僕の恥さらしになりますけれども、金を貸してくれる人にも、いろいろな人がありまして、十日と経たぬうちに、翌日から催促する人があったり、そうかと思うと、また僕の顔さえ見れば、貸してくれというんじゃないか、というふうにして、最初から僕と会ったとたん、ハラハラする人も居ったんですが、いろいろ人の性格とか、そういうものもいつの間にか勉強させられるようになったんですが、まあ、この金の借り方というのも、田舎ではできないんじゃないかと思うのであります。

これは余談になりますが、さるとき、僕の友人が、この人には、金を一度も借りたことがなかったんですけれども、その友人の方から、君は僕とつきあっていて、どうして僕に金を貸してくれといわないのか、金を借りなかったために、おこられたことがあるんです。本人がそういつてくれたんで、ついに僕も、それでは必要な時に、また頼むからといって、時どき借りるようになっていたんですけれどもその友だちが妙な友だちで、家の人なはこっそり、別に貯金帳なんかつくって、ぼくが借りにいくと、その、つまり僕用の貯金帳をもってたわけなんです、僕が借りにいくと、それじゃ一緒に行こうといって、その仕事場から貯金帳をもって、いくら要るんだといって、時どき貸してくれた。

まあ、そういうふうにして生活の面とか、精神の面とかいろいろな意味で、この都会は僕にとって、ひじょうに有難い場所なんです、これは何にもしかし、東京の恩恵ばかりを、蒙っているんじゃない。僕も都会を何ほどこ面倒を見ているところも、あるんじゃないか、と、こういう自惚れた気持ちも多少ありますが、このありがたい都会の生活でも、僕の次の詩のような生活を長年つづけているのであります。

談話

底を歩いて
何のために
生きているのか
裸の跣で命をかかえ
いつまで経っても
社会の底にばかりいて
まるで犬か猫みたいじゃないかと
ぼくは時に自分を罵りながら

人間ぶったぼくの思い上がりなのか
猫や犬に即して
自分のことを比べてみると
いかにも人間みたいに見えるじゃないか
犬や猫ほどの裸でもあるまいし
一応なにかでてくるんでいて
なにかを一応はいていて
用でもあるみたいなふりをして
生きているのだ

まあ、今の詩のような生活をずいぶん続けてきたのですが、土管の中に寝たり、あるいは人の軒下に寝たり、あるいはもう、その夜の寝る場所もなくなって、夜通し街中を歩いて、そして翌日、知りあいのところを訪ねて行って、その部屋にちょっと昼寝させてもらったりなんかした、と。まあ、そんなふうなわけで、東京と僕というのは、もう切っても切れない、これはもうくされ縁だと思って、そのくされ縁のうえに立って、東京と大いに仲良くしていこうと思っています。

※この一文は、ラジオ放送されたという「在りし日の猫さんの声」の録音から採ったものである。
13回忌（1975年7月19日）に行われた「東京で猫さんを偲ぶ会」で紹介された。

※「談話」の詩は題名が「底を歩いて」となって、詩集「鮪と鰯」に収められている。